

大正の広重と言われた吉田初三郎

—観光ブームの中で人気を博した鳥瞰図—

■大正の広重

吉田初三郎(1884~1955)は「大正の広重」と言われた鳥瞰図の絵師である。初三郎式と呼ばれる遠近法を用いた鳥瞰図で、強調したい部分を中央に置き、周辺部分は思い切ってデフォルメが施されている。大正から昭和へと時代が進むなか、鉄道の整備が進み、一般庶民も旅行を楽しむようになってきた。観光ブームが高まると、吉田初三郎が編集に関わった『鉄道旅行案内(1921年)』が人気を集め、観光鳥瞰図の第1人者となり、レトロでモダンな画風で、近代日本の姿を今に伝えている。



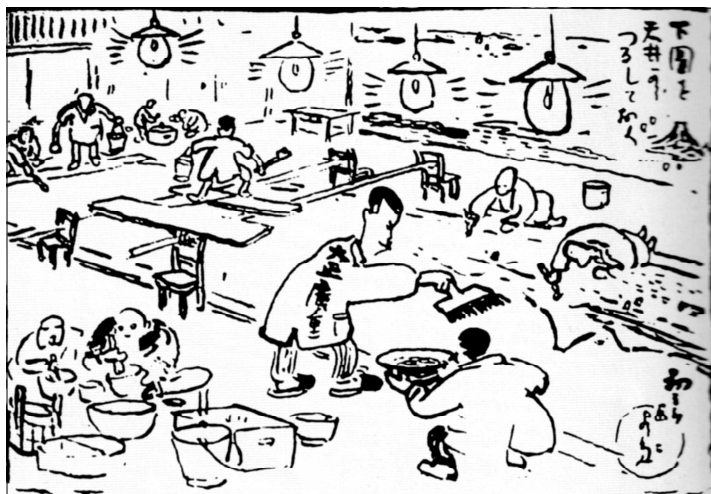
吉田初三郎

■吉田初三郎の生涯

吉田初三郎は、1884(明治17)年に京都に生まれた。10歳で友禅織の画工となり、その後洋画を学び、関西美術院の鹿子木五郎に師事した。

初三郎が1913(大正2)年に作成した「京阪電車御案内」が、たまたま皇太子時代の昭和天皇の目にとまり、分りやすいとお褒めを頂く。

1923年頃、名古屋鉄道の依頼を受け、日本ライン沿線図を作成していたとき、関東大震災で画室を焼失したが、名古屋鉄道が協力の手をさしのべ、会社施設であった犬山の蘇江倶楽部に拠点を移し制作を続けた(1923年~1936年)。戦時中は港湾等が軍機に関わるとして不遇でしたが、戦後も「広島原爆八連図」の製作などを続け、1955(昭和30)年に71歳で没した。



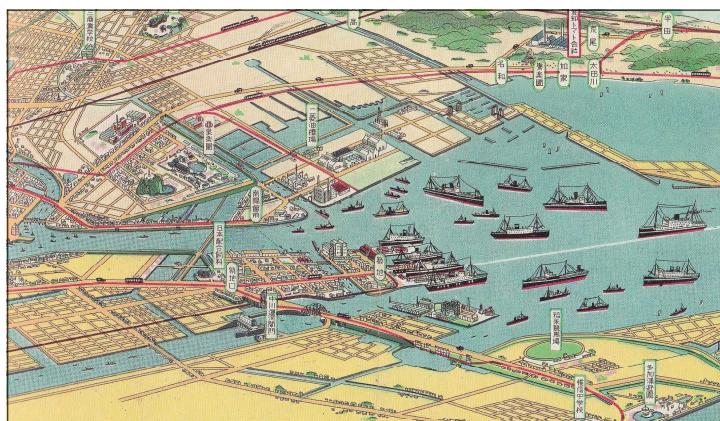
蘇江倶楽部での制作の風景

■中部地域の鳥瞰図

吉田の作品は全国各地に及んでいるが、中部地方でも多治見、郡上八幡、桑名など数多くの作品が制作されている。名古屋都市センターでも「日本ラインを中心とする名古屋鉄道沿線名所圖繪(昭和3年)」、「愛知縣鳥瞰圖(昭和9年)」、「名古屋市鳥瞰圖(昭和11年)」を所蔵しており、その写しを今回出展している。

戦前、名古屋の最も繁栄した頃の街の様子が詳細に描き込まれ、見飽きることがない。吉田の鳥瞰図は、資料調査を踏まえて大正、昭和期の地域が分りやすく描き込まれており、多くの自治体史や社史の紙面を飾っている。

名古屋鉄道の社史『名古屋鉄道株式会社百年史』にも「名古屋鉄道沿線案内図」などが紹介され、『新修豊田市史』(地図編)でも「拳母町鳥瞰図」が掲載され、『一宮市景観計画』(2021年)では、1934年と1952年の「一宮市鳥瞰図」が表紙に使われている。



名古屋港の鳥瞰図 1937(昭和12)年

(浅野伸一)